

Title	則天武后と母の恩
Author(s)	西川,幸宏
Citation	中国研究集刊. 2012, 54, p. 16-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58054
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 則天武后と母の恩

な記事が見える。 ・舊唐書』卷五「高宗本紀」上元元年の条に次のよう

はじめに

十二月……壬寅、天后意見十二條を上り、王公・敕して文武官三品已上は紫を服し、金玉の帶……。 聖皇后と為す。皇帝を天皇と稱し、皇后を天后と稱 秋八月壬辰、追尊して宣簡公(李熙)を宣皇帝と為 す。咸亨五年を改め上元元年と為し、大赦す。戊戌、 し、太穆皇后を太穆神皇后と為し、文德皇后を文德 高祖神堯皇帝と為し、太宗文皇帝を文武聖皇帝と為 し、懿王(李天賜)を光皇帝と為し、太祖武皇帝を

> 父在らば母の為に服すること三年なるを請う。② 百僚は皆『老子』を習い、毎歳明經は一に『孝經 『論語』に準じて有司に例試するを請う。又た子は

西

|||

幸 宏

新した。 皇」に、皇后を「天后」に改めて、官僚の服飾規定を刷 と太宗及びその皇后に尊号を贈り、皇帝の呼称を「天 改めるにあたり、唐王朝の先祖や先代の皇帝である高祖 唐の高宗は咸亨五年(六七四)秋八月、元号を上元に

『孝經』や『論語』に準ずる教育の書として採用された 子』についても試験を行うことを請うた。『老子』が 箇条の意見書を出して、王公や官僚に『老子』を習わ 同年の十二月には、「天后」すなわち則天武后が十二 毎年の明經科では『孝經』『論語』に準じて、『老

う意図があったのだろう。がらも、唐の始祖と称される老子の道教を重視するといのは、歴代の中国王朝で重んじられてきた儒教をたてな

議論が起こされることになる。 世中であっても子は母のために三年の喪に服すること である。これは『儀禮』「喪服」など を請うていることである。これは『儀禮』「喪服」など を請うていることである。これは『儀禮』「喪服」など が、高宗はこれを受け入れて詔を出している。そして、 り、高宗はこれを受け入れて詔を出している。そして、 な宗の時代に至ると、『舊唐書』卷二十七「禮儀志七」 という規定を改めるよう求めたものであ であ である。これは『儀禮』「喪服」など である。これは『儀禮』「喪服」など の古禮に定められた「父の在世中は母の喪を三年から一 に、この武后の上表文をめぐって官僚たちによる一連の に、この武后の上表文をめぐって官僚たちによる一連の に、この武后の上表文をめぐって官僚たちによる一連の

喪禮思想の一端を窺おうとするものである。何なる論理が介在していたのかを考察し、唐代におけるでいたのか、また、喪禮の改定に儒教倫理とは異なる如つ、武后の上表文が喪禮史において如何なる意味を持っつ、武信の追儀志七」に記される議論を仔細に検討しつ

## 一、武后の上表文

武后の上表文「請子父在為母服三年」の条の具体的な

.容は、「禮儀志七」に次のように記されている。

内

こと一期に止むれば、父を尊ぶの敬周しと雖も、 を推りて濕れるに居り、苦きを咽みて甘きを吐き、 學 母に非ざれば生まず、母に非ざれば育まず、燥ける 竊かに謂うに、子の母に於けるや、慈愛特に深し。 心喪すること三年なりと雖も、 るを請う」。高宗詔を下して、議に依りて行う。(3) ことを恐る。今、父在らば母の為に三年の服を終う 更に一期を以て周くせしめば、人子の志を傷つけん 「斬衰」、喪服の制を指す)は、差減を為すに足るも、に報ゆるの慈闕くる有り。且つ齊斬の制(「齊衰」と て宜しく崇報すべし。若し父在らば母の為に服する 情すら、猶お其の母を知る。三年懷に在り、理とし 生み養いて勞瘁し、恩は斯に極まる。 服すること一期(一年)に止むるの如きに至りては、 上元元年、 天后上表して曰く、「父在らば 服は尊に由りて降す。 所以に禽獸の 母の為に

については、『儀禮』「喪服」に次のようにある。上表文のはじめに見える「父在為母服止一期」の規定

(經) 父在らば母の為にす。

三年にして然る後に娶るは、子の志を達せしむるな在らば、敢えて其の私尊を伸ばさざるなり。父必ず傳に曰く、何を以て期とするや。屈するなり。至尊

『儀禮』「喪服」は、喪禮の際に身に着けるべき喪服に 「期」(一年)の喪に服するケースとして、「父在為母」が挙げられているのである。 で、右の引用では、「齊衰」を着て杖をつき、 一年の「齊衰」、九ヶ月の「大功」、五ヶ月の「小功」、 一年の「齊衰」、九ヶ月の「大功」、五ヶ月の「小功」、 一年の「齊衰」、九ヶ月の「大功」、五ヶ月の「小功」、 一年の「齊衰」、九ヶ月の「大功」、五ヶ月の「小功」、 一年の「齊衰」、九ヶ月の「大功」、五ヶ月の「小功」、 一年の「齊衰」、九ヶ月の「大功」、五ヶ月の「小功」、 一年の「齊衰」、九ヶ月の「大功」、五ヶ月の「小功」、 一年の「齊衰」、九ヶ月の「大功」、五ヶ月の「小功」、 一年の「齊衰」、九ヶ月の「大功」、三などが定められている が挙げられているのである。

年に短縮するのである。また、父が母の没後必ず三年以尊(母)」への気持ちを「屈して」、母の喪を三年から一この場合、「至尊(父)」が在世中であるため、子が「私いう。つまり、もともと父母の喪は三年とされるが⑤、するのか)」と問題提起し、その答えとして「屈也」とついて、まず「何以期也(なぜ母への服喪期間を一年とついて、まず「何以期也(なぜ母への服喪期間を一年と

三年の喪に服する)の志を遂げさせるためなのだという。三年の喪に服する)の志を遂げさせるためなのだという。三年の喪に服する)の志を遂げさせるためなのだという。た改め、父の在世中でも母の喪を短縮するというこの規定れに対し、武后は上表文で「父在為母服止一期」の規定なきでめ、父の在世中でも母の喪を父と同じ三年に延ばすれに対し、武后は上表文で「父在為母服止一期」の規定できであると主張した。その結果、高宗は武后の上表をできであると主張した。その結果、高宗は武后の上表をできであると主張したのである。

どとは異なっている。
れており、經書などの記載を引用して論拠とする場合なてみよう。ここは武后が個人的な意見を述べた形で記さるのだろうか。「竊謂……」以下で述べられる部分を見るのだろうか。「竊謂……」以下で述べられる部分を見では、武后はこの上表文でどのような論理を用いてい

まずいものを食べて、甘く旨いものはない」。 とはできない。母は眠るとき、乾いた処に子を寝か である。母でなければ産めないし、母でなければ育てる であり、母の恩ほど深いものはない。だから、鳥や獣で であり、母の恩ほど深いものはない。だから、鳥や獣で であり、母の恩ほど深いものはない。だから、鳥や獣で であり、母の恩ほど深いものはない。だから、鳥や獣で であり、母の恩ほど深いものはないし、母でなければ育てる であり、母の恩ほど深いものとき、乾いた処に子を寝か であり、母の恩ほど深いものはないし、母でなければ育てる であり、母の恩ほど深いものはない。だから、鳥や獣で であり、母の恩ほど深いものはないし、母でなければ育てる であり、母の恩ほど深いものはないし、母でなければ育てる であり、母の恩ほど深いものはない。だから、鳥や獣で であり、母の恩ほど深いものはないし、母でなければ育てる であり、母の恩ほど深いものはない。だから、鳥や獣で であり、母の恩ほど深いものはないし、母でなければ育てる

理が見てとれる。

理が見てとれる。

理が見てとれる。

のである。武后のこの発言からは、父を母よりも尊ぶためである。武后のこの発言からは、父を母よりも尊ぶたのである。武后のこの発言からは、父を母よりも尊ぶために、母の服・忠服の規定を改めることを認めさせたることで、高宗に喪服の規定を改めることを認めさせたることで、母の喪を延ばす根拠として武后が挙げたのここで、母の喪を延ばす根拠として武后が挙げたの

は、武后の上表文に続いて盧履冰の提言が記されている。の皇帝であった玄宗に提言がなされた。「禮儀志七」に開元五年(七一七)に、盧履冰という人物によって当時ところで、武后の上表文が出されてから約四十年後の

請い、通典に叶うを 庶う」。(6) 開元五年、右補闕・盧履冰上言す、「禮に准るに、 火在らば母の為に一周にして除靈(喪服を脱ぐ) と雖則も、彝典(旧典)を紊す有り。今陛下 孝も と雖則も、彝典(旧典)を紊す有り。今陛下 孝も と雖則も、彝典(旧典)を紊す有り。今陛下 孝も と雖則も、彝典(旧典)を紊す有り。今陛下 孝も と難則も、彝典(旧典)を紊す有り。今陛下 孝も と難則も、彝典(旧典)を紊す有り。今陛下 孝も で天下を理むるに、動に禮經に合す。舊章に仍るを で天下を理むるに、動に禮經に合す。「禮に准るに、 開元五年、右補闕・盧履冰上言す、「禮に准るに、

ここで盧履冰は武后の上表文に対して異議を申し立て

ものであるから、もう一度古禮によって改めるべきだと今ではそれが通行しているが、これは古禮の規定を乱すている。武后が母の服喪期間を一年から三年に延ばし、

討を要するという意見が出されたのだが、では武后の上このように、玄宗の時代に至り、武后の上表文は再検主張するのである。

表文はなぜ見直される必要があったのだろうか。

に以て文理を成すに足らしめ、則ち之を釋く。(ミ)きなり。故に先王 之が為に中制を立てて節し、壹が若し。然れども之を遂ぐれば、則ち是れ窮まり無三年の喪、二十五月にして畢るは、駟の隙を過ぐる三年の喪、二十五月にして輩。

までも続ければきりがないので、古の王が中庸を得た適ここでも三年の喪は「二十五月」とされ、服喪をいつ

を短縮するという流れに反していたのである。当な長さに止めたとある。武后の上表文はこの服喪期間

点で、儒家の古禮に合致しなかったのである。 に、武后の上表文はこの父母の尊卑関係を乱したというだ。武后の上表文はこの父母の尊卑関係を乱したというだ。武后の上表文はこの父母の尊卑関係を乱したというだ。武后の上表文はこの父母の尊卑関係を乱したからである。『儀禮』「喪服」で見たように、儒教の古禮にはてある。『儀禮』「喪服」で見たように、儒教の古禮にはいる。「本家の古禮に合致しなかったのである。

である。

こつ目は、「父在為母服三年」という提案が天子である。これ日は、「父在為母服三年」という提案が天子である。これと女による権力の掌握、武后にだったからである。これと女による権力の掌握、武后に

# 一、武后の上表文をめぐる議論

武后の上表文をめぐる議論について考察する。武后の上表文をめぐる議論が記されている。以下、この開元五年の盧履冰の提言を発端に、「禮儀志七」には

きだと主張する

べきだと田再思が主張し、これに盧履冰が反駁を加え冰の提言に対して武后の上表文により母の喪は三年にす諸家による議論の流れを先に述べておくと、先の盧履

纂した際、武后の上表文によって母の服喪期間が三年にの開元二十年(七三二)に蕭嵩等が『大唐開元禮』を編元七年(七一九)に玄宗が勅を下す。それから十三年後る。その後、元行沖が盧履冰を支持する意見を述べ、開

める。
次に議論の焦点とそれに対する各論者の見解をまと定められ、議論はひとまず終着をむかえる。

これに対して盧履冰と元行沖はあくまでも古禮に従うべである。田再思は夫婦に尊卑の関係があることを認めながらも、喪の際には尊卑の隔てなく同等に父母の養育のがらも、喪の際には尊卑の隔てなく同等に父母の養育のはなく、母は父よりも短い一年にするべきだと主張する。また、古禮に対する見解の相違がある。田再思は禮とまた、古禮に対する見解の相違がある。田再思は禮とまた、古禮に対する見解の相違がある。田再思は禮とまた、古禮に対する見解の相違がある。田再思は禮とまた、古禮に対する見解の相違がある。田再思は禮とまた、古禮に対する見解の相違がある。田再思は禮とは、母は、母は、父母は同等であるかという問題まず焦点となるのが、父母は同等であるかという問題まず焦点となるのが、父母は同等であるかという問題まず焦点となるのが、父母は同等であるかという問題

武后によるものではなく、高宗によって出されたものだすことは朝政の混乱を意味するから、田再思はこの詔はなのかという問題がある。皇后が天子に代わって詔を出最後に、「父在為母服三年」の規定は誰が出したもの

のだとして、唐朝を簒奪するための布石であったと指摘と主張する。これに対して盧履冰はこれを武后によるも

見てゆこう。 それでは、「禮儀志七」の原文によって議論の内容を

述べている。

する。

### ①田再思

まずは田再思の主張である。次の引用では、父母は同まずは田再思の主張である。次の引用では、父母は同

に報い、以て極まり罔きの恩に酬ゆる者なり。(章) で報い、以て極まり罔きの恩に酬ゆる者なり。(章) の制、齊斬殊にする有るも、考妣の三年の喪、貴賤の制、齊斬殊にする有るも、考妣の三年の喪、貴賤の制、齊斬殊にする有るも、考妣の三年の喪、貴賤の制、齊斬殊にする有るも、考妣の三年の喪、貴賤の制部郎中・田再思建議して曰く、乾は尊く坤は卑し、刑部郎中・田再思建議して曰く、乾は尊く坤は卑し、

服など喪服の規定があることをふまえながらも、「考妣」る。そして喪禮の際には故人の尊卑の等級によって、五係があるように、夫婦にも尊卑関係があることを指摘すまず「乾・坤」「天・地」「陰・陽」にそれぞれ尊卑関

問題がある。次の引用では田再思が古禮に対する見解をまた、母の喪に際して古禮に従うべきかどうかというめに、父母に対して同等に行うのだと主張する。懐之慈」や「罔極之恩」印、つまり養育の恩に報いるた(亡き父母)の喪に際しては、その尊卑に関わらず「免

周公 爰に厭降の儀を殊にし、 明らかに古より已來、升降一ならざる者なり。 に遇うに及びて、猶お此れ疑を致すがごとし、 に從うべしと謂う有り。此等並て四科の數、 異父の昆弟の服を大功と謂い、子夏は合に齊衰の制 子思は其の子の出母に服するを聽さず、子游は同母 為すのみを知る。……子張は高宗の諒陰三年を問い ず、地より出でず、人の消息に在りて、適時 は俗に從い、斟酌は時に隨う。故に禮は天より降ら 人、高く孔門を歩み、親しく聖訓を承くるも、 禮を制するの後、 孔父 經を刊してより已來、 以て服紀の節を標す。 十哲の の中と

喪服の規定ができたのであり、禮とは天や地から生じた(父が在世中の場合、母の喪を一年に短縮する)などの周公が禮を制定し、孔子が經を刊した後に、「厭降」

禮に従う必要はないと主張する。 まっていないことを強調して、時代に合わなくなった古見解は異なり、昔から喪服の等級についての解釈が定見解は異なり、昔から喪服の等級についての解釈が定のであるとする。また、十哲に数えられる子張、子思、のではなく、人が斟酌して時宜に適うように作ったもものではなく、人が斟酌して時宜に適うように作ったも

べる。

見解を述べている。 見解を述べている。 見解を述べている。次の引用では、「父在為母服三年」の規定がらである。次の引用では、「父在為母服三年」の規定に誰が出したものなのかという問題について、田再思がは誰が出したものなのかという問題によって出された理由の一つは、これが高

「父在らば母の為に三年」は、之を行いて已に四紀「父在らば母の為に三年」は、之を行いて已に四紀を踰ゆ、出づること高宗大帝の代よりし、則天皇后を踰ゆ、出づること高宗大帝の代よりし、則天皇后と有らん、何の彝倫を紊すこと有らん。而るに之こと有らん、何の彝倫を紊すこと有らん。而るに之こと有らん、何の彝倫を紊すこと有らん。而るに之こと有らん、何の彝倫を紊すこと有らん。而るに之こと有らん、何の彝倫を紊すこと有らん。而るに之こと有らん、何の彝倫を紊すこと有らん。回るに之に服すること周年とせんと欲す、伯叔母と齊しくするか、姑姉妹と同じくするか。印

あり、武后による簒奪時代に出されたものではないと述終的に認められ、正式な手順を踏んで定められたもので「父在為母三年」は、高宗の時代に武后が上表して最

親族よりも重視する姿勢が窺われる。と同じになってしまう(タム)と述べる部分には、母を他の兄弟とその妻)や「姑・姉妹」(父の姉妹や自分の姉妹)また、母の服喪期間を一年にしたら、「伯叔母」(父のまた、母の服喪期間を一年にしたら、「伯叔母」(父の

履冰の反駁を見てみよう。 以上、田再思の見解を見てきた。次にこれに対する盧

### ②盧履冰

る。次の引用を見てみよう。 よって反駁を加え、父母に尊卑関係があることを強調す 田再思の主張に対して、盧履冰はあくまでも古禮に

末俗に隨いて、兒女の情を顧念すること無かれ。臣め、斷えず宸衷に在りて、詳らかに此の禮を正し、付ること周(一年)なるは、二尊を避くるなり」。伏すること周(一年)なるは、二尊を避くるなり」。伏中ること周(一年)なるは、二尊を避くるなり」。伏上に二王を無く、國に二君無く、家に二尊無きは、土に二王を無く、國に二君無く、家に二尊無きは、

は後代に復た婦の夫政を奪うの敗有るを恐る。

尊いことを示している。

したものであり、盧履冰の主張の核心部分であると言えていることは、当時、社会の一部に、武后が強調したような「母の恩」を重視する風潮があったことを示唆している。
「別用の最後に見える「臣は後代に復た婦の夫政を奪うの敗有るを恐る」の部分は、武后による唐朝簒奪を指摘の敗有るを恐る」の部分は、武后による唐朝簒奪を指摘の敗有るを恐る」の部分は、当時、社会の一部に、

道を忘れんや。

る。次の引用では、武后の上表文が唐朝を簒奪するため

布石であったと指摘されている。

0)

Š ずる所は、蓋し夫婦の綱を正すを請う、 教を薄言して、舊章に依るを請う……。且つ臣の獻 らざれば、何を以てか戒めを後に垂れん。 宗廟何に由りてか克復せん。……若し早く刊正を圖 崩じ、韋氏旋即稱制す。陛下の英算を蒙らざれば、と雖も、韋氏復た晨鳴を效す。孝和は意らずも暴にと に易代の深釁を啓く。孝和(中宗)に名は正に反る 垂拱の末、果して聖母の偽符を行い、載初の元、遂 う……。天皇 り、將に僭簒を圖らんとするに、預め自ら先を崇 夫の上元肇年を原ぬるに、 慈愛の喪を升ぐるを請いて、以て尊嚴の禮に抗 (高宗) 晏駕するに、 則天已に潛かに政を秉 中宗塵を蒙る。 豊に母子の 所以に禮

神皇」の尊号を授けられたこと(空)、載初元年(六九〇) やに「聖母」の語を刻んだ石碑を偽造し、彼女が「聖母を廃位させ、垂拱四年(六八八)には武承嗣が武后のたを廃位させ、垂拱四年(六八八)には武承嗣が武后のた と述べる。また、高宗の没後、武后は中宗 と元元年の上表文は武后が唐朝簒奪を図り、母の喪を上元元年の上表文は武后が唐朝簒奪を図り、母の喪を

には いる。 ぬよう、 たことを指摘し、玄宗に再び女による王朝簒奪が起こら 更に中宗の代になっても、皇后の韋氏が権力を握っ 国号を周と改め、 僧侶たちに『大雲經』を偽造させて自ら帝位に即 古禮によって夫婦の尊卑関係を正すよう求めて 天授に改元したこと(20)に言及す

を示している。 とを求めているのであり、母子の道を忘れたわけでな い」と述べて、「母の恩」を否定するわけではないこと また、 引用の最後では「自分は夫婦間の秩序を正すこ

する元行沖の発言を見ておこう。 以上が盧履冰の主張である。次に盧履冰の主張を支持

なり。 徴し本を識り、情に縁りて服を制するに、申ばす有 ……貴賤を明らかにし、尊卑を辨かち、嫌疑左散騎常侍・元行沖奏議して曰く、「天地 殺ぐは、蓋し以て嫌疑を遠ざけ、乾道を尊ぶなり。 年にして、情理を俱に盡すは、心に因りて極を立つ 厭うる有り。 情理を分かつなり。 ……妻の喪 杖つくこと期にして、 天父、天夫、故に斬衰すること三 是を以て古の聖人は、性を 嫌疑を遠ざ 情禮倶に の性は

あ

元行沖の主張は盧履冰とほぼ一致する。ただ、

武后の

は、 や 為すを請う」。是れより百僚の議竟に決せず。 とせず、名教を傷つくる有り。……古に依るを當と 素の嫌を略し、非聖の責を貽せば、 ……今若し尊厭の重きを捨て、嚴父の義を虧き、 ......父在らば、 年)にして心喪すること三年、 則ち情を申ばして禮を殺ぐなり。 以て飛走(禽獣)に異なり、 母の為に職を罷め、 華夷を別つべし。 之を尊厭と謂う 則ち事は古を師 齊すること周 斯れ制する

をやめてしまったら、父の尊厳を侵し、 に服す)」し、これを「尊厭」と言う。 も尊いので「斬衰三年」の喪に服し、 したり、押さえたり)する概念が生まれた。 けることになる。だから喪に際しては古禮によるべきで から人は禽獣や異民族と異なるのである。もし「尊厭 は母の喪を一年に止めて「心喪三年(心の中で三年の喪 めるのは「乾道」を尊ぶためである。 定めた際に、 な儒者である。彼の発言の概略は、「古人が喪服の制を る」というものである。 元行沖は『孝經』の玄宗注に疏を付けたことでも有名 対象によって服喪期間を「申」「厭」(伸ば 父が在世中の場合 妻の喪を一年に止 喪服の制がある 儒教道徳を傷つ 父や夫は最

上表文と唐朝簒奪を結び付ける指摘には触れていない。上表文と唐朝簒奪を結び付ける指摘には触れていない。正行沖の発言の後、百僚の議論が定まらなかったとあることからは、「禮儀志七」に記される三人の他にも多くのは、武后の上表文と唐朝簒奪の結びつきという問題にのは、武后の上表文と唐朝簒奪の結びつきという問題にあう。盧履冰の発言は、唐代官僚が前代の出来事を如何ろう。盧履冰の発言は、唐代官僚が前代の出来事を如何ろう。盧履冰の発言は、唐代官僚が前代の出来事を如何ろう。盧履冰の発言は、唐代官僚が前代の出来事を如何ろう。盧履冰の発言は、唐代官僚が前代の出来事を如何のは、武石の大きのでは、西にいるいるがを知るうえで重要な記載である。

官僚たちが議論を行ったものと言うことができるだろう。官僚たちが議論を行ったものと言うことができるだろう。にありながらも、皆一様に「母」を「父」や「夫」に付属するものとして捉えているからである。これに対し、武后の上表文では「母」を「父」に付属するものとして捉えているからである。これに対し、武后の上表文では「母」を「父」や「夫」に付属す、ただ「母の恩」を示すことに重点がある。玄宗期にず、ただ「母の恩」を示すことに重点がある。玄宗期にありながらも、皆一様に「母」の喪の問題を「夫婦」やにありながらも、皆一様に「母」の喪の問題を「夫婦」やにありながらも、皆一様に「母」の喪の問題を「夫婦」やにありながらも、皆一様に「母」の喪の問題を「夫婦」や

## ④玄宗の下勅

元行沖の発言の後、官僚たちの議論は定まらず、開元

七年(七一九)に至り、玄宗によって勅が下された。

に依りて、齊衰すること三年なる者有り。 すること三年なる者あり。或いは既に周にして禮 りし、 同じからず。或いは既に周にして禫(服喪を除く祭 是れより卿士の家、父在らば母の為に服を行うこと しく一に喪服(『儀禮』「喪服」)の文に依るべし」。 するよりも、古を師とするに如かず。諸の服紀は宜 は、此れ為有りて為し、尊厭の義に非ず。其れ改作 の傳を為し、乃ち孔門の受くる所をや。格條の内 禮を制するや、當に歴代不刊なるべし。況んや子夏 七年八月に至りて、 『父在らば母の為に齊衰すること三年』と有る で<br />
で<br />
一年を終うる者有り。<br />
或いは上元の制 でであること<br />
六十日にして<br />
服を釋き、 敕を下して曰く、「惟 n . 周 公の

よ」というものであった。
は居の上表文をめぐる議論に対して玄宗が下した結論武后の上表文をめぐる議論に対して玄宗が下した結論武后の上表文をめぐる議論に対して玄宗が下した結論武后の上表文をめぐる議論に対して玄宗が下した結論

≦げ.o° この勅文を分析するにあたり、以下の二つの問題点を

いない。

一つは「此れ為有りて為し」の「為」が何を指すのかは明記されてただし、その理由が具体的に何を指すのかは明記されてに此めて「心喪三年」するという規定)ではなく、それに此めて「心喪三年」するという規定)ではなく、それに此めて「心喪三年」するという規定)ではなく、それにが、その理由が具体的に何を指すのかは別にである。玄宗は「為母三年の条」について、これは先にである。玄宗は「治母の人」が何を指すのか一つは「此れから

もう一つは「古を師とするに如かず」の「古」が何をもう一つは「古を師とするに如かず」の「古」が何をと考えれば、「古」は「為母三年の条」を含む既存の制と考えれば、「古」は「為母三年の条」を含む既存の制と考えれば、「古」は「為母三年の条」を含む既存の制と考えれば、「古」は「為母三年の条」を含む既存の制と考えれば、「古」は「為母三年の条」を含む既存の制と考えれば、「古」は「為母三年の条」を含む既存の制と考えれば、「古」は「為母三年の条」を含む既存の制と考えれば、「古」は「為母三年の条」を含む既存の制と考えれば、「古」は「為母三年の条」を含む既存の制と考えれば、「古」は「為母三年の規定に従う方がいいとを改めるよりも、元のまま三年の規定に従う方がいいとを改めるよりも、元のまま三年の規定に従う方がいいとを改めるよりも、元のまま三年の規定に従う方がいいとを改めるよりも、元のまま三年の規定に従う方がいいと言っているようにも読み取れるのである。

このように玄宗の発言は、『儀禮』「喪服」の規定にこのように玄宗の発言は、『儀禮』「喪服」の規定にこのように玄宗の発言は、『儀禮』「喪服」の元のである。

## 三、議論の決着

# ⑤『大唐開元禮』の成立

等によって五禮が改定され、『大唐開元禮』が完成した。玄宗の下勅から十三年後の開元二十年(七三二)、蕭嵩

頒つに及びて、乃ち一に依りて行う。② 母の為に齊衰すること三年なるを定めと為す。禮を 定め、又た議して上元の敕に依るを請い、父在らば 定め、又た議して上元の敕に依るを請い、父在らば

文によって「父が在世中の場合は母の為に齊衰三年の喪『大唐開元禮』が成立した際に、母の喪は武后の上表

れたのである。 盧履冰の提言から約十五年にわたる議論に終止符が打たに服する」ことで決着が付けられた。ここに開元五年の

(他の意向はどちらにあったのだろう。) 他の意向はどちらにあったのだろう。 他の意向はどちらにあったのだろう。 を改めずに残している。結果としては武后の上表 でにより母の喪は三年になった。もし玄宗の意向が「喪 下より母の喪は三年になった。もし玄宗の意向が「喪 をれに反するものだったことになる。玄宗は母の喪を一 をれに反するものだったことになる。生果としては武后の上表 をれに反するものだったことになる。先の勅で玄宗は、喪服 しかし、ここで疑問が生じる。先の勅で玄宗は、喪服

向を探ってみたい。

「為」は何を指すのか、という二つの問題について考え習慣」のいずれを指すのか、「此れ為有りて為し」の習慣」のいずれを指すのか、「此れ為有りて為し」の「古を師とするに如かず」の「古」は「古禮」と「古いる)一度考えてみる必要がある。以下に、先に挙げたもう一度考えてみる必要がある。以下に、先に挙げた玄宗の意向を探るためには、開元七年の勅文について

『開元禮』の成立により、武后の上表文をめぐる議論の記載中に見つけることができる。まず、一つ目の問題を解く手掛かりは、「禮儀志七」

なかったのを「袒免 ないと反論した。 仲昌、楊伯成、劉秩等が、古禮の規定を改めるべきでは するよう奏上した(社)。 弟と従姉妹)や舅母 を「小功 月)」に、 喪服が「小功(五ヶ月)」になっているのを「大功(九ヶ と官僚による喪服の規定についての議論が続いてい が終結した後、開 ここではまず韋縚という人物が、 舅の喪服が「緦麻(三ヶ月)」になっているの (五ヶ月)」に改め、堂姨舅 以上の議論をうけて玄宗は次のように 元二十三年 (母の兄弟の妻) には喪服の規定が (喪服の軽いもの)」を着ることに これに対して、崔沔、 (七三五) 古禮では外祖父母の (母の同姓 以降には、 韋述、楊 の従兄 . る。

み、 なり、 れば、 有り、 ぶれば、 注して『同爨は緦』と云う、 を制せず、朕思うに敦睦九族は、引きて之に親し 親姨舅は既に小功を服す、 上又た手ずから侍臣等に敕して曰く、「朕以 宜しく袒免を服すべし。 宜しく總麻を服すべし。堂姨舅は古今未だ服 則ち舅母の服は、全くは舅より降すを得ざる 服は是れ我を受けて厚し、服制の情を以てす 親則ち厚し。又た『喪服傳』に云う、 則ち舅母は舅に三年の服 又た鄭玄は 若し堂姨舅を同爨に比 『禮記 為らく 言う。

等更に之を熟詳せよ」。(差) というでは、別の服は皆總』、是れも亦た堂姨舅を隔てざるなり、別親の服は皆總』、是れも亦た堂姨舅を隔てざるなり。 親の服は皆總』、是れも亦た堂姨舅を隔てざるなり。

べている。 した上で、論者たちに更に詳しく議論を行うようにと述した上で、論者たちに更に詳しく議論を行うようにと述

玄宗は韋縚が「袒免」とした舅母の喪服を更に重くみて、「總麻(三ヶ月)」にするべきだとし、堂姨舅のためて、「總麻(三ヶ月)」にするべきだとし、堂姨舅のためて、「總麻(三ヶ月)」にするべきだとし、堂姨舅のためには、この玄宗の勅に対して裴耀卿、張九齡、李林甫等には、この玄宗の勅に対して裴耀卿、張九齡、李林甫等には、この玄宗の勅に対して裴耀卿、張九齡、李林甫等には、この玄宗の勅に対して裴耀卿、張九齡、李林甫等には、この玄宗の勅に対して裴耀卿、張九齡、李林甫等には、この玄宗の勅に対してもないと欲するに非ず(26)」と述べ、彼らの反対意見をやりこめてしまうのである。

かる。このことから、先の勅文に見える「古」は「古りも、むしろ古禮を改める意見に同調的だったことが分以上の玄宗の発言から、彼は古禮の規定に固執するよ

条」に対しても同調的だったのである。指していたと考えられる。恐らく玄宗は「為母三年の禮」ではなく、「為母三年の条」を含む「古い習慣」を

儒家の立場からすれば、盧履冰や元行沖の主張は正当儒家の立場からすれば、盧履冰や元行沖の主張は正当を改めな意見であった。ただ、玄宗は「為母三年の条」を改めな意見であった。ただ、玄宗は「為母三年の条」を改めずに残しておくことにした。開元七年の勅が、母の喪について一年ともことにした。開元七年の勅が、母の喪が三年に決定して「為母三年の条」が採用され、母の喪が三年に決定して「為母三年の条」が採用され、母の喪が三年に決定したことは、玄宗の意向に反するものではなく、むしろ彼の意向による結果だったと考えられる。

ことができる。
ことができる。
ことができる。
ことができる。
ことができる。
ことができる。
ことができる。
ことができる。
ことができる。

母子の道を忘れんや。臣の獻ずる所は、蓋し夫婦の綱を正すを請う、豈に

うとしたものは、「母の恩」であったと考えられる。うとしたものは、「母の恩」であったと考えられる。このことから、玄宗が母の喪において重視したこととは、母と子の道(あるべき関係)であり、子が「母の恩」に報いようとする姿勢であったことが窺われる。玄恩」に報いようとする姿勢であったことが窺われる。玄恩」に報いようとする姿勢であったことが窺われる。玄思」に報いようとする姿勢であったと考えられる。されて、「為母三年の条」を残す理由として彼が示そい。ただ、「為母三年の条」を残す理由として彼が示そい。ただ、「為母三年の条」を残す理由として彼が示される。

する考え方は、一体どこからきたのだろうか。重く見ていたと思われる。では、この「母の恩」を重視このように、玄宗もまた武后の強調した「母の恩」を

考えられ とあることから、初唐頃に中国で作られた偽經であると 董黯・郭巨等を引く、故に人の造るを知る。三紙②」 録』「偽妄亂真録」には、「父母恩重經一卷。 目録」に初めて登場し、七三○年に作られた『開 名は、六九五年に作られた『大周刊定衆經目録』「偽經 父母恩重經』という佛典が収められている。 「大正新脩大蔵經」「敦煌写本部類・疑似部」に ている一窓。 こ の 『父母恩重經』 の中に次のよ この 經に丁蘭・ 佛 元釋教 『佛説 典の

うな記載が見える。

人生まれて世に在れば、父母を親と為す。父に非ざれば生まず、母に非ざれば南せず。渇く時飲むを須むるも、母に非ざれば東せず。母は飢えに中る時、苦きも、母に非ざれば乳せず。母は飢えに中る時、苦きも、母に非ざれば乳せず。母は飢えに中る時、苦きも、母に非ざれば乳せず。母は飢えに中る時、苦きも、母に非ざれば乳せず。母は飢えに中る時、苦きも、母に非ざれば乳せず。母は飢えに中る時、苦きも、母に非ざれば乳せず。母は飢えに中る時、苦きも、母に非ざれば乳せず。母は飢れば、父母を親と為す。父に非ざん生まれて世に在れば、父母を親と為す。父に非ざれば生まず、母にない。

意すべきである。 この佛典は經名にもあるように、父母の恩を説いたもこの殊言との一致が認められる。また、武后の上表文に見める「非母不生、非母不育」「吞苦吐える「非母不生、非母不育。推燥居濕、咽苦吐甘」と、北乾就濕」という表現がほぼ一致していることに注甘、推乾就濕」という表現がほぼ一致していることに注す、推乾就濕」という表現がほぼ一致していることに注

され される。中でも「 母の養育の恩を表す言葉として佛典中に類似表現が散見 普曜經 ここに見える「推燥居濕」 た古い 卷二には、「推燥居濕、飲食乳哺 ・佛典に用例が見え、 推燥居濕」は、 や「咽苦吐 例えば、 晉代から南北朝期に訳 西晉 甘 の竺 などは、 使長大耳 父

は、 ろった用例は唐以降になると多く現れ、敦煌文書では れるようになったことが想像される。二つの表現がそ 初唐頃に、「母の恩」を重視する風潮が高まり(ヨ)、 て十恩徳の中に組み入れられている(33)。 いった環境の中で「母の恩」を示す二つの表現が併用さ (六七四)及び『父母恩重經』が成立したと考えられる このことからは、武后の上表文が出された上元元年 これらの表現も「咽苦吐甘恩」「迴乾就濕恩」とし (回 (回 敦煌文書などに見える父母の十恩徳としてまとめら 嚥苦吐甘」などとも書かれる(32)。 乾就濕、 咽苦吐甘」、元曲では「煨 後に一母の恩\_ (偎) そう

武后の上表文と『父母恩重經』に見える表現がほぼ

喪服の規定が改められてゆく中でも、

父が在世中の場

### 結語

唐代には『儀禮』「喪服」などに定められた喪服の規定を改めて、故人に対する喪服の等級を重くする傾向が定を改めて、故人に対する喪服の規定を改めているし、玄宗も母への服喪期間を「齊衰三年」に改めているし、玄宗もまた、章縚の建議をうけて喪服の規定を改めている(※)。また、章紹の建議をうけて喪服の規定を改めている(※)。また、章紹の建議をうけて喪服の規定を改めている(※)。は反するものであった。だから盧履冰や元行沖をは場には反するものであった。だから盧履冰や元行沖をは場には反するものであった。だから盧履冰や元行沖をは場には反するものであった。だから盧履冰や元行沖をは場には反するものである。

を持つと言えるのではないか。

を持つと言えるのではないか。

を持つと言えるのではないか。

を持つと言えるのではないか。

いるかもしれない。朝と比べて、佛教よりの傾向を持っていたことを示して視したと考えられることは、唐という王朝が他の中国王ず、古禮を改める傾向にあったことや、「母の恩」を重ず、古禮を改める傾向にあったことや、「母の恩」を重

### 注

改めた)。また、本文における引用では訓読のみを挙げ、注にの点校本(一九七五年)を底本とする(句読点や符号は適宜(1)以下、本稿で引用する『舊唐書』の記載は、中華書局出版

て原文を示す。

僚皆習『老子』、每歲明經一準『孝經』『論語』例試於有司。 皇帝為高祖神堯皇帝、太宗文皇帝為文武聖皇帝、太穆皇后為文德聖皇后。皇帝稱天皇、皇后稱天后。 立咸亨五年為上元元年、大赦。戊戌、敕文武官三品已上服紫、改咸亨五年為上元元年、大赦。戊戌、敕文武官三品已上服紫、改咸亨五年為上元元年、大赦。戊戌、敕文武聖皇帝、太穆皇后為皇帝、太祖武(2)秋八月壬辰、追尊宣簡公為宣皇帝、懿王為光皇帝、太祖武(2)秋八月壬辰、追尊宣簡公為宣皇帝、懿王為光皇帝、太祖武(2)

又請子父在為母服三年。

(3) 上元元年、天后上表曰、「至如父在為母服止 之敬雖周、 猶知其母。 年、服由尊降。竊謂子之於母、慈愛特深。非母不生、非母不育 推燥居濕、 期、 恐傷人子之志。 三年在懷、 咽苦吐甘、生養勞瘁、恩斯極矣。所以禽獸之情 報母之慈有闕。且齊斬之制、 今請父在為母終三年之服」。高宗下詔 理宜崇報。若父在為母服止 足為差減、 一期、 一期、 更令周以 雖心喪三

(4) (經) 父在爲母。

依議行焉

傳曰、何以期也。屈也。至尊在、不敢伸其私尊也。父必三

然後娶、達子之志也

するケースに該当し、服喪期間は共に三年である。 亡くなっている場合の母の喪は「齊衰」を着て三年の喪に服(5)【儀禮』「喪服」によると、父の喪は「斬衰三年」、父が既に

(6) 開元五年、右補闕盧履冰上言「准禮、父在為母一周除靈

- 王肅以二十五月禪除喪畢。而鄭康成則二十五月大祥、二十七(7)『禮記』「檀弓上」の孔穎達の疏に「間傳云、三年之喪……有紊彝典。今陛下孝理天下、動合禮經。請仍舊章、庶叶通典」。三年心喪。則天皇后請同父沒之服、三年然始除靈。雖則權行、
- 窮也。故先王焉為之立中制節、壹使足以成文理、則釋之矣。(8)三年之喪、二十五月而畢、若駟之過隙。然而遂之、則是無

月而禫、二十八月而作樂」とある。

酢而降、隆殺之義辨矣」とあり、鄭玄の注に「尊者禮隆、卑(9)『禮記』「郷飲酒義」に「至于衆賓、升受、坐祭、立飲、不窮也。故先王焉為之立中制節、壹使足以成文理、則釋之矣。

者禮殺、尊卑別也」という。

- (10) 刑部郎中田再思建議曰、乾尊坤卑、天一地二、陰陽之位分矣、大婦之道配焉。至若死喪之威、隆殺之等、禮經五服之制、齊夫婦之道配焉。至若死喪之威、隆殺之等、禮經五服之制、齊之恩者也。
- (1)「免懷之慈」は『論語』「陽貨」に「子生三年、然後免於父(1)」「免懷之慈」は『論語』「陽貨」に「子生三年、然後免於父母之懷」とあり、「罔極之恩」は『詩經』「小雅・蓼莪」に「父母之懷」とあり、「罔極之恩」は『詩經』「小雅・蓼莪」に「父母の。重輕從俗、斟酌隨時。故知禮不從天而降、不由地而出也、之節。重輕從俗、斟酌隨時。故知禮不從天而降、不由地而出也、之節。重輕從俗、斟酌隨時。故知禮不從天而降、不由地而出也、之節。重輕從俗、斟酌隨時。故知禮不從天而降、不由地而出也、之節。

不聽其子服出母、

子游謂同母異父昆弟之服大功、子夏謂合從

- 及遇喪事、猶此致疑、即明自古已來、升降不一者也。齊衰之制。此等並四科之數、十哲之人、高歩孔門、親承聖訓
- (3) 子張が孔子に「高宗諒陰三年」について問うたことは『論語』(檀弓上」齊衰の制に從うべしと言ったことは、共に『禮記』「檀弓上」齊衰の制に從うべしと言ったことは、共に『禮記』「檀弓上」。
- 而欲服之周年、與伯叔母齊焉、與姑姊妹同焉。 之情、虧純孝之心、背德義之本。有何妨於聖化、有何紊於彝倫。 可施行、編之於格、服之已久。……何必乖先帝之旨、阻人子可施行、編之於格、服之已久。……何必乖先帝之旨、阻人子以行、獨之政格、服之已入。 此自高宗大帝之代、不從
- (15)『儀禮』「喪服」によると、「伯叔母」と「姑・姉妹」の喪は、
- (17) 『儀禮』 「喪服」の「女子子適人者、為其父母、昆弟之為父 (16)於是紛議不定。履冰又上疏曰、 尊也」。伏惟陛下正持家國、孝理天下、 國無二君、 本無自專抗尊之法。即「喪服四制」云、「天無二日、土無二王 為天。出嫁、以夫為天」又「在家從父、出嫁從夫、夫死從子」。 無隨末俗、 家無二尊、 顧念兒女之情。臣恐後代復有婦奪夫政之敗者。 以一理之也。 ……『禮』、「女在室、 故父在為母服周者、 而不斷在宸衷、 詳正此 以父 避二

- 故未嫁從父、既嫁從夫、夫死從子」という。後者」に付けられた「傳」に「婦人有三從之義、無專用之道。
- 18 禮教、 韋氏復效晨鳴。 果行聖母之偽符、 慈愛之喪、以抗尊嚴之禮……。天皇晏駕、中宗蒙塵。垂拱之末 宗廟何由克復。 原夫上元肇年、 請依舊章……。 孝和非意暴崩、 ……若不早圖刊正、 載初之元、遂啓易代之深釁。孝和雖名反正 則天已潛秉政、將圖僭篡、預自崇先。 且臣所獻者、 韋氏旋即稱制。不蒙陛下英算 何以垂戒於後。所以薄言 蓋請正夫婦之綱、 豈忘母 請升
- 皇太后加尊號曰聖母神皇」とある。 魏王武承嗣偽造瑞石、文云『聖母臨人、永昌帝業』……五月、(19)『舊唐書』巻六「則天皇后本紀」「垂拱四年」の条に「夏四月、
- 革唐命、改國號為周。改元為天授」とある。 月……有沙門十人偽撰大雲經、表上之、盛言神皇受命之事。 月……有沙門十人偽撰大雲經、表上之、盛言神皇受命之事。 (20)『舊唐書』巻六「則天皇后本紀」「載初元年」の条に「秋七
- 21 斯制也、 申有厭。天父、天夫、故斬衰三年、 遠嫌疑、 為母罷職、 左散騎常侍元行沖奏議曰、「天地之性……明貴賤、 ·妻喪杖期、情禮俱殺者、蓋以遠嫌疑、尊乾道也。 ……父在 可以異于飛走、 分情理也。是以古之聖人、徵性識本、 齊周而心喪三年、 別於華夷。……今若捨尊厭之重、 謂之尊厭者、 情理俱盡者、 則情申而禮殺也 緣情制服、有 因心立極也 辨尊卑、 虧

- ……請依古為當」。自是百僚議竟不決。嚴父之義、略純素之嫌、貽非聖之責、則事不師古、有傷名教矣。
- 心喪三年者。或有既周而禫、禫服終三年者。或有依上元之制、傳、乃孔門所受。格條之内、有父在為母齊衰三年、此有為而為、傳、乃孔門所受。格條之内、有父在為母齊衰三年、此有為而為、是卿士之家、父在為母行服不同。或既周而禪、禫服六十日釋服、自縣之家、父在為母行服不同。或既周而禪、常歷代不刊。況子夏為)至七年八月、下敕曰、「惟周公制禮、當歷代不刊。況子夏為
- (23)二十年、中書令蕭嵩與學士改修定五禮、又議請依上元敕、

齊衰三年者。

- (公)「禮儀志七」に「韋紹奏曰……竊以古意猶有所未暢者也。且為外祖小功、此則正尊情甚親而服屬疏者也、請加至大功九月。堂姨舅姨舅儕類親既無別、服宜齊等、請為舅加至小功五月。堂姨舅姨別會類親既無別、服宜齊等、請為舅加至小功五月。堂姨舅
- (25)上又手敕侍臣等曰、「朕以為親姨舅既服小功、 母制服、 親之、宜服袒免。 於舅也、 三年之服、 姨舅也。 親則厚矣。 宜服緦麻。 亦何傷乎。是皆親親敦本之意、卿等更熟詳之」。 若以所服不得過本、 服是受我而厚、 又喪服傳云、 又鄭玄注禮記云『同爨緦』、若比堂姨舅於同 堂姨舅古今未制服、 以服制情、 『外親之服皆緦』、 而須為外曾祖父母及外伯叔祖父 則舅母之服、 朕思敦睦九族 是亦不隔於堂 則舅母於舅有 不得全降

- (26)朕情有未安、故令詳議、非欲苟求變古、以示不同。
- 述經典(其之五)』、七寺古逸經典研究叢書第五巻、大東出版社、(28) 岡部和雄「『父母恩重經』改題」(落合俊典編『中國日本撰(27) 父母恩重經一卷。經引丁蘭・董黯・郭巨等、故知人造。三紙。

二〇〇〇年)

中飢時、吞苦吐甘、推乾就濕……計論母恩、昊天罔極。嗚呼懷身十月……飢時須食、非母不哺。渴時須飲、非母不乳。母懷,人生在世、父母為親。非父不生、非母不育。是以寄託母胎、

慈母、

云何可報

- (30) 『父母恩重經』が「母の恩」を強調する点については、小南のである。小南氏はそこで「經名は「父母恩重經」と呼ばれてはいるが、具体的に描写されているのは、もっぱら母の恩の重さなのである」と述べている。(『説話・伝承学会 創立二十五周なのである」と述べている。(『説話・伝承学会 創立二十五周年記念論集』岩田書院、二〇〇八年三一頁)
- 佛教による「恩」の思想については、中村元「恩の思想」(『佛が受容される際に、『大方便佛報恩經』などの佛典によって、が受容される際に、『大方便佛報恩經』などの佛典によって、31)「母の恩」を重視する風潮が高まった背景には、中国で佛教
- 豈辭嫌厭。迴乾就濕、恐男女之片時不安」、『父母恩重經講經文』、)敦煌文書の用例としては、『維摩詰經講經文』に「咽苦吐甘、

教思想4』、佛教思想研究会、一九七九年)等を参照

曾煨乾就濕、嚥苦吐甘」、『神奴兒』第三折に「想着他嚥苦吐甘、に「迴乾就濕、咽苦吐甘」、元曲では、『虎頭牌』第三折に「也

供乾就濕」とある

- (33) 父母の十恩徳とは、父母の恩を十の項目によって表現したもの。敦煌文書ペリオ三九一九『佛説父母恩重經』に「爾時もの。敦煌文書ペリオ三九一九『佛説父母恩重經』に「爾時一者懷擔守護恩、二者臨産受苦恩、三者生子忘憂恩、四者咽一者懷擔守護恩、九者為造悪業恩、十者究竟憐愍恩」と見える。八者遠行憶念恩、九者為造悪業恩、十者究竟憐愍恩」と見える。八者遠行憶念恩、九者為造悪業恩、十者究竟憐愍恩」と見える。八者遠行憶念恩、九者為造悪業恩、十者究竟憐愍恩」と見える。八者遠行憶念恩、九者為造悪業恩、十者究竟憐愍恩」と見える。八者遠行憶念恩、九者為造悪養(武周革命)と佛教や『大雲經』の関係については、道端良秀『唐代佛教史の研究』(法蔵館、33) 父母の十恩徳とは、父母の恩を十の項目によって表現した。
- (35)貞觀十四年(六四〇)、魏徴等の奏議をうけて、太宗は喪服一九五七年)等を参照。
- 總麻、請與從母同服小功。制可之」と見える。
  無服、今請服小功五月報。其弟妻及夫兄、亦小功五月。舅服加為期。衆子婦小功、今請與兄弟子婦同為大功九月。嫂叔舊加為期。衆子婦小功、今請與兄弟子婦同為大功九月。嫂叔舊加為期。衆子婦小功、今請與兄弟子婦同為大功九月。嫂叔舊加為門。衆子婦小功、一體儀志七」に「(魏徵等日) 謹按、曾の規定を改めている。「禮儀志七」に「(魏徵等日) 謹按、曾の規定を改めている。「禮儀志七」に「(魏徵等日) 謹按、曾の規令。
- 初から唐の『開元禮』成立までの時期には、「喪は簡素にする元禮』對鄭玄和王粛禮学的擇從」に指摘がある。楊氏は、隋二禮、野服の規定を改めて重くする傾向ついては、楊華「論『開

があるので併せて参照されたい。 は、既に顧炎武『日知録』巻七「三年之喪」に詳細な考証があるので併せて参照されたい。